

ウサギはどこに行った？

山で餌が取れなくなる秋から冬にかけて、イノシシなどの農業被害を耳にします。山で暮らすイノシシは、夏季には、朽ちた間伐材を鼻で動かして、朽ち木の下や土中のミミズなどを探しています。かつては、落葉広葉樹のある里山で暮らす動物でしたが、私達の暮らしが変わる中で減少する里山からその生活場所を植林地に移して生き延びてきた動物です。その他にも、タヌキ、アナグマ、キツネなどが里山を追われました。雑食性の強いタヌキ、アナグマなどは生活の場を植林地に移しても器用に暮らしています。キツネは、それほど雑食性が強くないので、タヌキほど数を増やすことがなく、細々とくらししている感じです。

里山の動物で一番大きなイノシシは、その体つき同様に大食漢で、本来の生活の場から植林地に移っても餌の確保が難しいはずですが、イノシシの大きな特徴の多産が幸いして数を減らすことなく生き延びて、今はその数を増やし、農業被害につながっていると考えます。

ここまで紹介してきた、かつての里山の生き物達で、「ウサギ」がまだ登場していません。

昔から人の生活の近くで生息してきた動物で、古くは「古事記」の因幡の白ウサギ、昔話

の「かちかち山」「ウサギとカメ」などウサギをモチーフにした話はたくさんあります。

また、月にウサギが住んで、お餅をついているなどの話もあります。

現在でも、年配の方から子どもの頃、罠でウサギを取って食べたことがあると話を聞きます。数十年前まで日本人の暮らしの身近にいた動物の証です。しかし、今は山を歩いていてもなかなか遭遇できません。

ウサギは、タヌキやアナグマと違って、とてもストレスに弱く、里山の消失という大きな環境の変化に対応できなかった種類だといえます。

希少種でもなく、あまり注目されていない生き物ですが、生物多様性から考えて、ウサギが走り回る林ができれば、被捕食者（餌）として、キツネや猛禽類の安定的な生息環境の一端を担っていける存在だと考えています。どうすればウサギが増えるか、難しい課題です。

（杉野）

